石高神社社報

第十二号

発行日　平成六年十二月十五日
発行者　石高神社　宮司　高原　章兆
発行所　岡山市円山八五三　石高神社

石高神社の祭り

春祭りは、秋の収穫を願う祈年祭系のお祭りです。現在は氏子総代と宮司が祭典を行い、五穀豊穣だけでなく氏子中の安全と繁栄をお祈りしています。春祭の行事は祭典のみで、五月中旬にあります。

夏祭りは七月三十一日の晩です。このお祭りは夏越しの祓えの系統のお祭りで、年の前半の罪穢れを祓うお祭りです。もともとは六月三十日に行うお祭りです。人の形をした「ひとがた」に住所・氏名・生まれ歳の干支・性別などを書いてお参りします。また、昔は夏には疫病が多かったので疫病封じの性格も持っています。茅でつくった大きな輪をくぐったり、茅の輪を門口につける風習はこちらのほうです。これは備後風土記に出てくる「蘇民将来」の故事にもとづくもののようです。

秋祭りは十月三、四、五日の三日間です。最初の日は「氏参り」と称して氏子の皆様がお参りする日です。この日は夜店が出て賑わっています。三日が雨天の場合には、夜店は次の日の四日に来てもらうようにしています。祭りの最後の日の五日には、祭典を行っています。秋祭りはもともと新嘗祭系の祭りで収穫の感謝をするお祭りです。

秋祭りの期間中には子供たちが「だんじり」を引っ張って町内を回ります。昔からの立派な神輿はありませんが、これは備前藩が倹約に努めたためだと思われます。最近はお祭りの日を土・日曜にしてはどうかという意見があります。実際そのように祭りの日を変更した神社もありますが、夜店の数も減ってむしろさびれたという話も聞きます。当神社にとっては、祭りの日を変えることが繁栄につながるとはいえそうにないので、変えないことにしています。

氏子内の神社・神祠 ①

尾佐無神社

石高神社の氏子区域内には神社庁管轄下にある旧

社格村社が二社あります。今回は東山峠の県道沿いの湊の地に鎮座しておられる尾佐無神社について紹介します。

別名「井戸神様」と呼ばれていますが、御祭神は八衢比古神（ヤチマタヒコノカミ）、八衢比賣神、（ヤチマタヒメノカミ）久那斗神（クナトノカミ）です。この御神達はイザナギノカミの禊の時に生まれた神として日本書紀に登場され、道路に関わる諸々の災害を防ぎ止める交通安全の神様です。この地は昔から交通の要所であったことから祀られているものと思われます。また、これらの神はよく村境の道の脇や分かれ道の辻に道祖神（サエノカミ）として祀られています。

尾佐無神社は備前藩の文書である「撮要録」に載っており、来歴がわかります。これによると、延享四年（一七四七年）に「現在地をさす所に清水の出る所があり、香花を立て絵馬を置き、水神と唱えて誰が置いたかわからないが、小社を据え置いてある。放置していいものかどうか村役人から伺いが出された。」とあります。翌年には、円山八幡宮（現石高神社）の祠官と湊　円山　名主　大庄屋により存続の覚え書きが記載されています。その中には「祠と井戸があり、祠内に尾佐無大明神という書きつけがある」というようなことが書いてあります。

境内の生物 ②

マツ

明治二十七年に書かれた石高神社事由によると、「百五十年以上の老松此処彼処に散在老幹枝垂せり」とあり、昔は宮山には多くの松が繁っていました。古老の話によると、昔宮山の前が海だった頃に船をつないだロープの跡がついていた老い松があったそうです。今から三十年前にはまだ多くの松がありましたが、その後どんどんマツクイムシにより枯れてしまいました。マツは汚れた空気に弱いので大気汚染や酸性雨のせいかもしれません。

今の宮山には、成長の早い雑木ばかりでマツは数えるほどしか残っていません。アカマツは典型的な陽樹で強い光を好みますが、雑木にじゃまされてますます生存が危うくなっています。

この辺のマツはアカマツとクロマツがありますが、前者は葉が柔軟で色がうすく、樹皮が赤褐色でまつかさも赤褐色です。それに対して後者は葉は硬くて色も濃く、樹皮は黒褐色でまつかさは灰白色です。